

社会史の今日的課題（二）

百 木 英 明

「社会学者と歴史学者は知的な隣人であり」⁽¹⁾
 「今日過去のいかなる時期よりも、歴史学と社会学との関係は、より緊密なものとなっている」⁽²⁾といわれるように、社会学と歴史学、とりわけ社会史とはより身近な関係であらねばならない。なぜなら、社会学は、近代市民社会の成立という歴史の中で生まれてきた学問であるからといえる。

その社会学は、人間の社会生活における諸形態、特性を研究する、社会科学の一部門であり、その対象となるべき人間社会は、断えず発展し、変動する歴史的な社会であるといえる。それ故、社会学で研究対象とするあらゆる問題も（例えば、家族、農村、都市、文化、法等）歴史的条件の源から時代と共に、歴史の流れの中で、現われ変容してきたものである。つまり、いつ、どのような条件によって、どのような過程を経て、現代もしくは「現在」に到ったかという歴史的な解明なくしてはその実態を十分に把握することは不可能ということになる。デュルケームが言うように「一定の時期における人間に関する事物を説明しようと思うときは、……常にまずそのもっとも原始的で簡単な形態に遡り、その当時この形態がどのような特質によって決定されたかを考究することに努め、次いでそれがどのようにして次第に発展し複雑化し、どのようにして現在のような諸形態となったかを示さなければならない」⁽³⁾からである。しかし、我々の対象とする社会が歴史的な社会であっても、社

会学理論を見る限りにおいては、かならずしも歴史的考察が十分になされてきたとはいえず、ミクロな領域における研究の進展に伴う理論化の方向で、むしろ類型論やスタティックな分析にとどまる社会学も少なくない状況である。例えば、社会の変動を考察する際にも、産業化、近代化、都市化等や社会移動といった、個々の制度的な現象面についての変動分析であり、全体社会の変動についての認識は十分になされていないのが実状といえる。

ところで「歴史学から社会学へ提供できるものは変動であり、歴史学が社会学から学ぶものは構造である」⁽⁴⁾というように、社会の歴史的变化を対象とし、社会の発展史を扱う社会史は、社会学の領域においては、社会変動論もしくは歴史社会学と関連づけられる。とはいえ、社会学における社会史の概念規定については、未だ合意は形成されておらず、曖昧なものである。例えば、桜井庄太郎先生は、「社会学を人間の共同生活、集団生活の理論と考え、かかる社会学の理論に立脚した歴史が社会史であると解釈する。言葉を換えていえば、社会史はとくに人間の共同生活、集団生活に視点を置いた歴史である……それ故、史的研究においては、社会史的といっても社会学的といっても、私にとっては同じことに帰着する」⁽⁵⁾とされている。又、富永健一氏は、「歴史家によってなされてきた村落史と都市史に学びつつ、それらを社会学的に整序して、歴史の変動についての一般命題を構

築すること⁽⁶⁾とし、「社会変動ないし社会史⁽⁷⁾」とし、基礎理論としての社会変動論に対応するものとして、現実的な具体化の仕事としての社会史⁽⁸⁾の性格を位置づけられている。又、ピーター・パークは、「社会史と歴史社会学は同義である⁽⁹⁾」としているように、明確な定義づけには到っていないのである。それならば、社会の歴史的变化を理論として、理論的に把握することを意図している社会変動論、そして歴史社会学はどのような状況であるのか。

(一)

社会学においては、構造と変動とを対概念として扱い、社会変動は「社会構造の変動」として理解されている。ここでは、社会生活の過程のダイナミックな把握を主とする、社会変動論を検討する。

たしかに、「十年一昔」とか「世の中変わった」とか「社会変動の激しい時代」といったように、我々は、“社会”が固定したものではなく、文字通り変わることが当然のこととして、ごく普通に、“社会変動”という表現を用いている。しかし、いざ、社会変動を把握しようとする、内容は多岐に亘り、曖昧なのが実状であるといえる。富永健一氏のように、地殻変動を例にとりて、(1). 変動の空間的拡がり、(2). 変動の時間的拡がり、(3). 変動の強さ、(4). 変動の急激性⁽¹⁰⁾といった参考にするべき4つの指標を示し、類推による作業をされる方法もある。そして、氏は「社会変動の理論にとっての問題は、技術の進歩が経済を発展させ、それが更に『社会の成長』をもたらす、そしてそれとともなって社会が構造の変動をひきおこす、という過程をあとづけること、および……経済の成長と社会の成長とのバランスの問題を考えること……この二点こそが、まさに『社会変動の理論』⁽¹¹⁾にとっての中心問題」とし、「社会生活において昨日と今日とで同じでないもの⁽¹²⁾」とした上

で、「社会変動とは、制度化された規範による人員配分および所有配分に、変化を生ずる過程である⁽¹³⁾」と定義されている。つまり、ここでは、社会変動の定義として、二つの側面が考えられる。一つは、社会変動が制度化された規範（人員の配分や所有の配分の基礎となる）の変化を意味することであり、もう一方は、社会変動が、人員の配分や所有の配分の比率の変化や、持続的な配置の変動を意味する側面であるといえる。このことは、社会構造を「制度化された規範による人員配分および、所有配分の持続的な配置⁽¹⁴⁾」とした定義にもとづいたものであり、「構造の変動」として理解される。更に、氏は変動の概念規定として、「一つの構造は体系の機能的必要をみたしかつ当該体系に固有の目標を実現しているかぎりにおいて、基本的な変化なしに存続しうる。そのような場合、体系はその構造のもとで均衡状態にあるわけである。しかしながら、現行の構造のもとで当初は均衡していた体系が、なんらかの条件変化のために、体系目標および体系の機能的必要を十分には効率的に達成しえなくなったとしよう。体系内に不満が生じ、より効率的な達成能力をもつ新しい構造を模索する動きがあらわれるであろう。もちろん、現行の構造を維持することに利害関係をもつ当事者はこの動きに抵抗を示すであろうから、ここに体系内には緊張 tension さらには葛藤 conflict がつくり出されるであろう。しかし、振子がナナメの位置に静止しえないのと同様、社会体系もまた内部に緊張や葛藤をかかえたままの状態では静止することはできない。緊張や葛藤の存在はいよいよ体系の目標達成能力を低下させる結果になるから、構造を変化させる動機づけをいよいよ高めるであろう。かくしてけっきょく、体系の構造変動がひきおこされるであろう。体系の構造変動は、低下した体系の目標達成能力をふたたび一定の要求水準以上

に引き上げる方向においてなされるであろう(目的論的仮定)。すなわち、体系は再均衡化の実現にむかう⁽¹⁵⁾とされている。この長い一文に見られる氏の考え方は、体系の平常の状態は、動きのない、均衡状態として捉え、それと対比されるのが変動状態であるといえる。つまりは、均衡状態を社会構造と規定し、均衡状態から、静止した状態とは別のものとしての変化した状態を経て、均衡に欠ける状態とは別の状態としての再均衡化の状態が変動であるということになる。いわゆる弁証法的な考え方がそこには見られるのである。そして、均衡状態から均衡状態へつなぐ過程を変動過程として捉えている。また、体系を、構造とは別に、変動状態とも別に在るという考え方がみられる。しかし、体系が構造とは別に変動状態にあることは起り得ず、我々が視ることができるのは構造であり、その構造の中に変動が含まれるものとしての構造を捉えねばならないといえる。更に、均衡状態にある体系に、なんらかの条件が加わり、体系が緊張や葛藤を含むようになり、静止した状態ではなくなり変動がもたらされるとすると、その何らかの条件とは何か。そして条件の変化を引き起こす主体が何であるのか。それは、何故に、どのようにして起こるかが明らかにされなければ変動することとはいえないのではないのか。そのことは、均衡状態を保ちつづける条件が何かを問題にすることでもあり、同時に、社会構造を問題にすることにつながるのである。そして、変動を含みながらも社会が存続していることが、均衡状態にある社会構造といえる。それ故に、変動を捉える時の基本的視点は、不均衡な面を含みながらも、維持されている社会構造と、その次にもたらされる社会構造との相違を明らかにすることでなければならないといえる。又、氏のいう、一つの構造は、基本的な変化なしに存続するという場合の基本的とは

どういう場合をさして、何がどう変わることが基本的な変化としているのであろうか。更に、その場合の構造の対象はマクロな社会でなければならないのである。氏も変動考察の際のステップとして、量的側面と質的側面を区別しているように、量の増減を問題にするのではなく、質の問題、内容の問題として変動を捉えねばならないのである。

富永氏のように、均衡と変動を分ける考え方は、直井優氏⁽¹⁶⁾や小松堅太郎氏⁽¹⁷⁾にもみられるのであるが、構造と構造の違いを捉えるのを変動とすることから、問題とされるのは、構造の在り方であるといえる。

そうした点で、構造・変動のみでは社会変動を十分に説明しえないとし、変動分析のためには、社会組織の概念を導入すべきであると主張したのが、R. ファースである。

ファースの社会の存在の必要条件としての構造概念は、(1). 社会の構成員の人的整序化の配置(社会的配置)、(2). 社会生活における諸活動を統制する信念や知識の体系(社会的統制)、(3). 活動に対する言語を含む基盤(社会的媒体)、(4). 価値の体系(社会的標準)⁽¹⁸⁾の4条件を示している。そして、ファースの構造規定の特質は、社会的配置(狭義の社会構造)を社会構造が具体化されるものとして、人間の現実的な行為に対して規範的意味を持つ期待の型や、価値・理念の図式を考慮されるべきものとした点にある。更に、行為者は、許される状況の範囲で、自らの要求にもとづく選択・決定の行為を通して、新しい複合的な要素を組み合わせる作業を行うとしている。そうした行為者の行為が、社会生活の過程で、他の共同体の構成員にもたらされる波及効果を重視し、この社会生活の過程で生ずる変化を二つに区別して、「社会的対流」と「社会的伝導」⁽¹⁹⁾と名付けている。彼によれば、社会的対流とは、行為において既成のパターンと異

なる行動をとると、他者にも同じような変更をおこさせる変化であり、社会的伝導とは、構成員の望まれていない変化が、他者に対して強制的な効果をおよぼし、新しい行為の方法のパターンを形成する過程を起こさせ、社会の変動に強い効果をもたらす変化であるとしている。また、社会構造の補完的側面としての社会過程に関わる点を社会組織化として、その社会組織について以下のように説明する。

「社会組織の概念は、社会変動の理解のためにもまた、重要である。(社会組織には)、社会的行動の全体を貫通する構造的要素があり、そして、それらの要素は、比喩的に、社会の骨格、社会の形式と呼ばれるものである。しかし、この形式は何か。それは、実際には、行動の持続性や反復からなるものであり、それが、社会生活における持続性の要素なのである。社会人類学者は、不断の問題として、この持続性の説明と同時に社会変動も説明するという明らかなディレンマに直面する。持続性は、期待の確実さを助成し、将来においての類似の経験のために、過去の経験の有効性を助成する諸関係のセットとしての社会構造に表される。社会の成員は、行為のために信頼するに足る指針を求め、そして社会の構造は、——家族・親族体系、階級関係、職業上の分布などを通して、この指針を与えている。同時に、変化と変化を説明する余地もなければならない。この余地は、選択と決定の行為による社会諸関係の体系的に秩序付けられた社会組織に見い出されるのである。ここに、過去において明らかに似たような環境で起こった事柄とは別の事柄が起こる余地がある。つまり、ここに、時間が入り込んでくるのである。選択の実施以前の状況は、その後の状況とは異なっている。いくつかの方向への可能性としての要素を伴う未解決の問題は、特定の方向性を与えられた可能性を伴うことで、いま

や解決された事柄になったわけである。……構造的形式は、先例を用意し、選択的な可能性の範囲に限界を与える。みためには自由な選択が行使できる範囲はしばしば非常に小さい。しかし、変化の可能性を起こさせることが、選択の可能性なのである。一個人は、意識的にか無意識的にか、彼が進むであろう方向を選ぶことになる。そして、その彼の決定は、将来の構造的配置に影響を及ぼすことになる。社会構造の状況では、社会の持続性の原理が見出され、組織の方面では、変化ないし変動の原理——状況の評価と、個人的選択の介入を許すような——が見出されるのである。⁽²⁰⁾つまり、選択と決定の余地が、構造的制約の中で残されている点に、変動分析の手がかりを求めているといえる。

以上のことから、社会変動論においては、「社会構造の変動」として定義されるが、いくつかの問題点を指摘できる。

(1). 対象とされる“社会構造”の概念が明確・一定でないため、変動の捉え方も自ずと多様化せざるを得ないこと。(2). 社会構造の概念を一定の観点からに限定し、その観点から捉えると、構造的な要素のみの変化を問題として扱い、構造的と見なされない要素における変化は取り扱われないこと。(3). “変動”の概念に先行するものとして“構造”⁽²¹⁾の概念規定をすると、固定的な静態的な概念化を前提としてしまうことである。

こうした問題点については、エリアスは、「構造」と「機能」といった概念形成によって、本来は「過程」と「発展」の諸問題であるべきものを、静態へと還元してしまっていると批判している。また、R. ブードンは、「なぜ社会変動理論は失敗したか」⁽²²⁾と題する論文で、第二次大戦以後、社会変動理論は、経済学者、社会学者、政治学者等の社会学者が、多くの変動理論を

著しているが、それらは、社会変動の説明と予見に関わるものであり、予言として、一般的説明としての存在の説明として、そして理論のためのモデルとして提示されているだけであると批判して、(1). 社会構造の首尾一貫性の仮説、(2). 法則定立的仮説、(3). 構造的仮説、(4). 存在論的仮説の4点から変動理論の貧困を指摘している。しかしながら、この問題は、社会変動研究に際しての、研究者の歴史に対する態度によって相違が出てくるといえる。その一つが、1960年代まで支配的だった、歴史的脈絡に基づいて、社会変動の一般理論を形成する立場であり、もう一方が、具体的な歴史的過程を分析することにより、社会変動の性質を解明する立場である。この後者の立場からのアプローチが、最近の「歴史社会学」とされる立場である。それならば、「歴史社会学」の今日の状況、及び基本的特質は何か、次に問うべき事柄であるといえる。

(二)

社会学史における歴史社会学の展開を視てみると、社会学は、近代市民社会の成立という歴史的現実の中から生まれ出て、研究対象とするものも近代市民社会であり、歴史とは不可分の関係に成立したといえる。社会学の基礎を築いたモンテスキュー等にも、歴史との関連の中での社会理論としての性格があった。コントが、歴史上の資料を用いて、過去を三段階に分けて、重要な潮流の性質を明らかにしたように、スペンサーは社会進化の過程を説明し、「野蛮」から「文明」への、社会の発展法則を導き出したのである。20世紀初頭においても、E. デュルケームは、「社会分業論」「宗教生活の原初形態」等の著書において、歴史を重視し、過去が社会学にとって有益かつ不可欠として、歴史的視点の必要性を強調していたといえる。M. ウェー

パーも研究の素材を歴史に求め、歴史的知識の深さに基づいた研究を行った。

そうした背景の中、1920年代になって、歴史を社会とは無関係に実在するものではなく、社会学と歴史主義との関係について、理論的な究明を試みたのが、K. マンハイムであり、彼の「歴史主義」によくみてとれる。「歴史主義が歴史的文化科学の全領域に広く導入した動態Dynamicsの問題の出現によって、社会学は重大な形態変化をこうむることになる。普遍化的な自然諸科学を目標として成立した社会学は、もっぱら^(ママ)普通化的方法によって研究してきたし、現実の歴史的要素をその対象から、いわば淘汰し、削除してきた⁽²⁴⁾。」と批判し、「マルクス主義的な社会学ばかりでなく、他の傾向のものうちにも、ヘーゲル的な要素が広範に作用している。これが社会や経済の諸形式の普遍化的類型論を、その時どきに变化する諸様式の一回的な発展段階へと変形させ、こういう仕方では歴史哲学的要素が、社会学のなかに浸透し、その地歩を確立することも十分に期待されるであろう⁽²⁵⁾。」と説き、社会を考察する際に、社会の歴史的発展を重視した。また、彼自身の社会学研究でも、特に歴史社会学を重要視することを示唆している。更に、「歴史的・具体的生成を、その成層と構造の視点から研究する」知識社会学の課題を中心にすえながらも、ナチが政権掌握するまでのドイツ社会学の危機に際し、ドイツ社会学は、「ひとつの非常に重大な社会解体とその再組織の産物であり、それは非常に高度の自己意識と自己批判⁽²⁶⁾を携えたものである」とし、危機に際しては、社会が解体・崩壊するというのではなく、諸々の制度・組織の分解検査の上に再組織化を援助することを可能にする点を含んでいると指摘した。そのアプローチとして、「(1). 孤立した客観的要因のおのおのを、变化する社会の全体性の部分として見なすこと、(2).

各精神的現象や観念を、具体的社会状況との連関で位置づけること、(3). あらゆる知的態度や、人間行動のあらゆる形態のうち、新しい状況にたいする無意識の適応を見出すこと⁽²⁷⁾を示している。こうした点は、今日の「社会史」へのアプローチと共通する点であるといえる。

ドイツの崩壊から再建の過程で、ドイツ社会学が寄与したような、19世紀ヨーロッパの社会学の建設者達がもっていた歴史的関心から離れたと批判されたアメリカ社会学は、「歴史的・比較的視点から見た社会変動や全体社会の諸側面の研究から、対人関係・小集団構造の研究や意志決定過程の分析への移行によって特徴づけられ、… 定量的方法の改良がなされるようになった。」⁽²⁸⁾ そのことは、1950年代の社会学を「行動科学」とした試みにあらわれている。又、この時期に、構造—機能主義や社会進化論による社会変動の理論化が行われた。それに対して「歴史・比較社会学の再登場は、最近数十年の社会学研究を特徴づけてきた定量的技術、厳密な方法論・体系論的理論の強調が誤りであったという感じが、社会学者の側で一般的になった」⁽²⁹⁾ というように、社会変動理論の一般化に対する批判もふえてきた時期でもある。その一人として、C. W. ミルズは、「誇大理論」や「抽象化された経験主義」に依拠するものが、人間と社会の歴史性を無視していると批判し、「どんな社会科学も、歴史を超越するとは考えられない……その名に値するのは、全て『歴史社会学』である」⁽³⁰⁾ とした。又、A. グルドナーは、「必要とされているのは、社会の『社会的』な側面に関する抽象的な視点を与えてくれるだけの社会学などではなくて、歴史的に位置づけられているひとつの^{トータルティ}全体性としての具体的社会——その社会的『側面』に劣らず、その経済的、政治的、言語的、精神力学的な『側面』を含んだ——という見方を与えてくれるような^{ホーリスティック}全体論的な社会

科学なのである⁽³¹⁾」として「歴史への感性を備えた社会学」⁽³²⁾としての「自己反省の社会学」を主張する。更に、70年代以降においては、「社会的『理論』を歴史的『事実』から切り離すべきではない」⁽³³⁾ とするティリーや、「歴史形成作用」⁽³⁴⁾ という言葉で社会的分析の中に歴史学を導入する A. トゥレーヌなど、今日の〈歴史社会学〉の抬頭する時期といえる。

こうした背景としては、社会の変化が急速に拡大し、社会学者も社会変化に注目せざるをえなくなってきたことがある。又、1950年代に、現実世界の理解をより容易にする作業から導きだされるモデルとしての機能主義的アプローチに従って研究を行う間に、社会構造の背後にある「行為者」の意図、状況を考慮せずに、外側から社会生活を研究する危険と、方法の欠陥を認めざるをえなくなり、現象学的社会学、象徴的相互作用論などとして、方法の反省がせまられたといえる。そうしたことから、従来の外側からの説明に内側からの理解を関わらせるべきものとしての生活史や社会史、歴史社会学の抬頭があるといえる。同時に、社会学は本来、歴史的⁽³⁵⁾ 事実⁽³⁵⁾ に根ざしたものであり、「社会的理論には、より歴史的⁽³⁵⁾ 地平が必要であり」⁽³⁵⁾、それ故に、歴史社会学は、社会学における一特殊分野ではなく、社会学の「エッセンス」⁽³⁶⁾ であって、「社会学者はいつも歴史的に配向した研究を行う」⁽³⁷⁾ のが当然という考え方が⁽³⁷⁾ あるといえる。それ故、こうした動向は、「長い間お互いの領域に関心を持ちつづけてきた」⁽³⁸⁾ 社会学と歴史学との関係を密にし、距離を縮めることに役立つことになる。そして、様々なステレオタイプへの反省がせまられることを意味することになる。例えば、「社会学は法則定立的であり、歴史学は個別記述的である」⁽³⁹⁾ とか、「社会学が共時的であるのに対して、歴史学は通時的である。」⁽³⁹⁾ また、「歴史学者が“過去”と呼ばれることに、社会

学者は「現在」と呼ばれることに関心をいさぐ⁽⁴⁰⁾」等がそれである。しかし、こうした関係に対しては、エリアスの「各時代にわたる事実関連を発見し、それを解明し、長期間の枠組における個々の観察を経験的証拠として、理論形成する方法」⁽⁴¹⁾。また、ウォーラステインの「現在の社会の動態を正しく理解するためには総合的な理論が要求されるが、その理論は歴史上のあらゆる時間、あらゆる空間を含めて、可能な限りもっとも広汎な現象の研究を基礎としなければならない」⁽⁴²⁾等から、上記のステレオタイプへの反省がなされている状況にある。そして、「社会学というのは、さまざまな歴史的社會を研究するもので、それぞれの社會は特殊な歴史的な原因と条件とによって作り上げられた独自のものなのです。……もし社会学が豊かな研究領域になろうというのであれば、歴史と同じように、特殊なものとの一般的なものとの関係を取り扱わねばならないでしょう。しかし、社会学も……静止した社會の研究でなく、社會の変化および発展の研究にならねばなりません。あとは、ただ、歴史が社會学的になればなるほど、社会学が歴史的になればなるほど、双方にとって好都合である⁽⁴³⁾」という、E. H. カーのように、社会学と歴史学の収斂の方向に向かうであろうといえる。それ故、歴史社会学の今後の進むべき方向を、ティリーは、(1). 多くの集合行為の歴史的背景の構築、(2). 急速に拡大する構造的変動（特に、国家形成、資本主義の発展、プロレタリア国家形成、そして人口成長）に関する我々の諸観念の歴史的再編成⁽⁴⁴⁾であるとしている。

こうした学史的展開から歴史社会学の特質を整理すると、社会学と歴史学との総合としての性格、社会学批判として、社會変動論への新たな視角としての方面が提示される。更には、社会学における歴史の再生に、その主たるねらいがあるといえる。

（三）

社會の歴史的变化を対象とする社会学と歴史学で、特に両者を結ぶ場としての社会史の中心的課題は、歴史的に変動する社會の動因は何かということである。社會に対して、歴史に対して働きかける主体としての人間と、その主体的契機が何か問われることである。しかし、高度に発達した資本主義社會では、人間疎外状況が増々深まり、人間の解放に向かう生産力の発展は、大気汚染、環境破壊、資源問題といった諸問題を露呈してきている状況にある。そうした時、社会史のモチーフとして、沈黙していた匿名層を正面の舞台に登場させる作業には、理論的な面よりも感性が重視され、中世の“個”を感じさせるような、人間くさい、一種のロマンチズムがあるといえる。同時に、歴史を支えている日常的な営みを正常な状態として再現することに、そして、生きた人間たちを対象に、人間の全体性を把握する全体史として、社會の特徴を示す「骨格」のモデルを明示することに社会史のねらいがある。そして、方法論として重要な点は、現在中心的位置を占める中世という異質な世界、異質な文化をまとまりのあるものとして描きながらも、現実、現代の諸問題とどう結びつけていくかの課題が残されている。又、今日、「歴史」の言葉が重みを失いつつある状況で、我々は、E. P. トムソンが指摘するように、「階級概念は、歴史的な諸関係の概念を必然的に伴う。他のどんな諸関係のように、我々が、いついかなる時点で関係を止め、その構造を解剖しようと試みても、分析をだめにするのが、一つの流れである。すばらしく細かくあまれた社会学的網でも、階級の純粋な標本を我々に示すことはできない⁽⁴⁵⁾。」とする批判に対して、社会学の歴史的地平を拡大しつつ、社会史の特徴を大いに生かしていかなければならない。バーガー・ルックマン

の言うように、「社会学は人間を人間としてとり扱う諸科学の一団のなかにその定位置をもっているということ……、それは、人間主義的な学問である。……社会学は歴史学と哲学という二つの学問との不断の対話のなかで作業をすすめなければならず、このことを忘れると、社会学はその本来の研究対象を見失ってしまう、ということである。この対象というものは、人間によって作り出され、人間によって居住され、そしてまた逆に人間をつくり出しながら不断の歴史的過程のなかにある、人間的世界の一部分としての社会である⁽⁴⁶⁾」ということになる。

社会史の流行の中で、どのように社会学との架橋をかけるかを課題として、社会変動論から歴史社会学への流れを考察してきたが、より具体的な資料を元に、社会変動論、歴史社会学の精緻化に努めることを今後の課題としたい。

1987.11.23

(未完)

〔注〕

- (1) ピーター・バーク、森岡敬一郎訳、「社会学と歴史学」、慶応通信、1986、p. 3.
- (2) Gareth Stedman Jones, “From historical sociology to theoretical history” in *British Journal of Sociology*, 1976, Vol. 27-No. 3, p. 295.
- (3) E. デュルケーム、古野清人訳、「宗教生活の原初形態」(上)、岩波書店、1987、p.21.
- (4) ピーター・バーク、前掲書、p.119.
- (5) 桜井庄太郎、『青少年史の研究と教育社会学』「教育社会学研究 第2集」、1952、東洋館出版社、p.93.
- (6) 富永健一、「社会構造と社会変動」、放送大学教材、1987、p.203.
- (7) 同上、p.203.
- (8) 富永健一、「社会変動の理論」、1979、岩波書店、p.ix.
- (9) ピーター・バーク、前掲書、p.32.

- (10) 富永健一、「社会変動の理論」、1979、岩波書店、p.230～p.234.
- (11) 富永健一、「新しい産業社会」1965、鹿島研究所出版会、p. 209.
- (12) 富永健一、「社会変動の理論」、1979、岩波書店、p.236.
- (13) 同上、p.255.
- (14) 同上、p.237.
- (15) 富永健一、『社会体系の構造と変動』、「法社会学講座第4巻」、岩波書店、1972、p. 187.
- (16) 直井優氏は、「社会体系の構造の大規模な変動に由来する過程——第二の過程の意味は、社会体系の構造自体の変化に関連している。それは、社会体系の均衡状態がくずれ、不均衡や不安定均衡の状態におちいることである。この過程が……ある変化がもとの均衡状態に回復することなくその逸脱の傾向をつよめこれまでとは異なった安定した均衡に到達するまで、変化が持続することにある。これは〈社会変動〉(Social change)の過程である。」としている。『社会体系の構造と過程』、「社会学講座1. 理論社会学」、東京大学出版会、1974、p. 168～p. 169.
- (17) 小松堅太郎氏は、「社会は初め何らの反対勢力をも含まぬときは平穏を保ちつつ存続するが、かかる状態は均衡の状態とよばれる。しかるにこの中に反対勢力が生まれるときはじめてこの均衡が破れて社会が変動を開始し、反対諸勢力間に摩擦が生じた後にこの諸勢力間の反対がより高き段階において総合されるならば、再び均衡が回復する。」としている。小松堅太郎、「社会変動論」、有斐閣、1953、p. 60.
- (18) Raymond Firth, “*Elements of Social Organization*”, Greenwood press, 1981, p.86. 同著、正岡寛司監訳、「価値と組織化」早稲田大学出版部、1978、p.49.
- (19) R. Firth, 同上、p. 41～p. 43. 同訳、p.103. 104.
- (20) R. Firth, 同上、p. 39～p. 40. 同訳、p. 45～46.
- (21) ブローデルは、「“構造”ということばに、社会的疑問をいだけ観察者たちは、組織・結合とか社会的実在と集団との間に相対的に固定化された関係を意味している。我々歴史家にとっては、“構造”は当然のこととして、形成され、建築物であり、ゆっくり時間によって長い期間に浸食される現実にすぎない」としている。Fernand Braudel,

“On History” The University of Chicago Press, 1980, p. 31.

- (22) ノルベルト・エリアス, 赤井慧爾他訳, 「文明化の過程」(上), 法政大学出版局, 1977, p. 422.
- (23) Raymond Boudon, “Why Theories of Social Change Fail: Some Methodological Thoughts” in *Public Opinion Quarterly*, 1983, Summer, Vol. 47, p. 143~p. 159.
- (24) K. マンハイム, 稲上毅訳, 『歴史主義』, 「マンハイム全集, 1, 初期論文集」潮出版社, 1975, p. 334.
- (25) 同上, p. 334.
- (26) K. マンハイム, 川崎嘉元訳, 『ドイツにおける社会学の問題論』, 「マンハイム全集, 3, 社会学の課題」, 潮出版社, 1976, p. 237.
- (27) 同上, p. 242.
- (28) S. リブセット, 鈴木広他訳, 「革命と反革命」, サイマル出版会, 1972, p. 1.
- (29) 同上, p. 2.
- (30) C. W. ミルズ, 鈴木広訳, 「社会学の想像力」, 紀伊国屋書店, 1978, p. 192.
- (31) A. W. グルドナー, 村井忠敬訳, 「社会学のために」(上), 杉山書店, 1987, p. 195~p. 196.
- (32) A. W. グルドナー, 栗原彬訳, 「社会学の再生を求めて, 3」, 新曜社, 1975, p. 234.
- (33) C. Tilly, “As Sociology Meets History” Academic Press, 1981, p. 213.
- (34) A. トゥレーヌ, 杉山光信訳, 「歴史への希望」, 新曜社, 1979, p. 137.
- (35) C. Tilly, 前掲書, p. 7.
- (36) P. Abrams, “Historical Sociology” Open books, 1982, p. 2.
- (37) T. Skocpol, “Vision and Method in Historical Sociology” Cambridge University Press, 1984, p. 362.
- (38) K. T. Erikson, “Sociology and The Historical Perspective” in *The American Sociologist*, 1970, Vol. 5 (November), p. 331.
- (39) 同上, p. 332.
- (40) 同上, p. 331.
- (41) ノルベルト・エリアス, 赤井慧爾他訳, 「文明化

の過程」(上), 法政大学出版局, 1977, p. 422.

- (42) I. ウォーラーステイン, 川北稔訳, 「近代世界システム I」, 岩波書店, 1985, p. 13.
- (43) E. H. カー, 清水幾太郎訳, 「歴史とは何か」, 岩波書店, 1987, p. 94.
- (44) C. Tilly, 堀江湛監訳, 「政治変動論」, 芦書房, 1984, p. 285.
- (45) E. P. Thompson, “The Making of The English Working Class” Penguin Books, 1984, p. 8.
- (46) P. L. パーガー, T. ルックマン, 山口節郎訳, 「日常世界の構成」, 新曜社, 1978, p. 320.

〔参考文献〕

- ・R. ベンディクス, 森岡弘通訳, 「歴史社会学の方法」, 木鐸社, 1986年.
- ・中内敏夫, 「新しい教育史」, 新評論, 1987年.
- ・N. J. スメルサー, 橋本真訳, 「変動の社会学」, ミネルヴァ書房, 1974年.
- ・F. ブローデル, 福井憲彦他訳, 「ブローデル 歴史を語る」, 新曜社, 1987年.
- ・P. M. ブラウ, 斎藤正二監訳, 「社会構造へのアプローチ」, 八千代出版, 1982年.
- ・ル・ロワ・ラデュリ, 樺山紘一他訳, 「新しい歴史」, 新評論, 1980年.
- ・樺俊雄博士古稀記念論文集編集委員会, 「歴史社会学とその周辺」, 中央大学出版部, 1975年.
- ・喜安朗, 「パリの聖月曜日」, 平凡社, 1986年.
- ・A. W. グルドナー, 岡田直之他訳, 「社会学の再生を求めて 1, 2」, 新曜社, 1974年, 1975年.
- ・福井憲彦編, 「シリーズ プラグを抜く. 5. 歴史のメトロロジー」, 新評論, 1984年.
- ・ウィルバート・E. ムーア, 松原洋三訳, 「社会変動」, 至誠堂, 1968年.
- ・二宮宏之, 「全体を見る眼と歴史家たち」, 木鐸社, 1986年.

(ももき ひであき, 本学助手)